

30E06-am04S

細菌性皮膚感染症に使用されている抗菌薬の抗菌活性の比較

○中瀬 恵亮¹, 中南 秀将¹, 野口 雅久¹, 笹津 備規¹(¹東京薬大薬 病原微生物学教室)

【目的】近年、市中感染症である皮膚感染症患者から薬剤耐性菌が多く分離されている。薬剤耐性菌による難治化は皮膚感染症に留まらず、様々な疾患で報告されている。抗菌薬には殺菌性と静菌性の作用を有する薬剤があり、この作用は薬剤によって異なる。薬剤耐性菌の出現を防ぐためには、抗菌薬の抗菌力を知り、適切に使用する必要がある。そこで本研究では、皮膚感染症患者から分離された *Propionibacterium acnes* および *Staphylococcus aureus* に対して、皮膚科で汎用されている各種抗菌薬の抗菌活性の評価を行った。

【方法】2009 年から 2010 年に分離されたニキビ由来 *P. acnes* を 27 株、type strain JCM6425 株および薬剤感受性株 JCM6473 株を加えた 29 株、2010 年に分離されたトビヒ患者由来 *S. aureus* を 29 株および薬剤感受性株 JCM2874 を加えた 30 株を対象菌株とし、最小発育阻止濃度 (MIC) および最小殺菌濃度 (MBC) の測定を行った。

【結果・考察】*P. acnes* では、clindamycin 以外の静菌性抗菌薬の 90%殺菌濃度 (MBC₉₀) が 90%発育阻止濃度 (MIC₉₀) の 4 倍以上であったのに対し、全ての殺菌性抗菌薬の MBC₉₀ は MIC₉₀ の 2 倍以下であった。一方、*S. aureus* では、全ての静菌性抗菌薬の MBC₉₀ が MIC₉₀ の 64 倍以上となり、全ての殺菌性抗菌薬の MBC₉₀ は MIC₉₀ の 2 倍以下であった。本研究から、殺菌性抗菌薬は、MIC 値と MBC 値が近似であり、より低濃度での殺菌効果が期待出来るため、有効性が高いことが実証された。従って、皮膚感染症における抗菌薬の選択は、薬剤耐性菌の出現および拡散を防ぐためにも、殺菌性抗菌薬の使用が有効であることが示唆された。

会員外共同研究者: 池田政身 (高松赤十字病院・皮膚科)、西嶋攝子 (西嶋皮ふ科)